

# 奈良と薬のストーリー

## ストーリー 1 〈施薬〉

### 1. 古代の医療のよりどころ

日本最古の都が置かれた奈良県には、薬の発祥から製造・販売までの歴史があります。薬が登場する前、人々は、病魔から身を守るため専ら神への祈りに頼っていましたが、大陸の文化や医術の伝来により次第に形あるもの、つまり、そうこんもくひ草根木皮から造られる薬をよりどころとすることとなります。この神への祈りと薬を大切に思う願いは、おおみわじん大神神社や狭井神社などの祭礼に今も残っています。



大神神社大鳥居

### 2. 飛鳥時代から始まる薬の収集・製造・せやく施薬

薬の発祥には、大陸の医術の知識や身近な生活の知恵が関わることとなるが、薬草の採取・収集から、次第に栽培に移行しながら、朝廷の機関や僧たちが薬として調製し民衆に施すこととなります。

飛鳥時代、朝廷は大陸から医術や仏教の伝来を進め、薬物は民を養う要物として薬草の収集や栽培が始まります。日本書紀によると、611年と612年に推古天皇は大陸の行事に倣って宇陀と高取くすりで薬が猟を行ったとされています。その後、次第に栽培に移行していき、680年に建立された本薬師寺には薬園も設けられたとされます。藤原宮跡から発掘された木簡には、生薬名や薬を司る機関名の記載が見つかっています。701年の大宝律令下で典薬寮てんやくりょうとして医療全般を司る機関が整備され、その中には薬園師やくおんし2名が置かれ薬園管理と薬園生6名を教育していました。周辺の山野の薬草を集めたり、平城京の周辺で薬園を運営するほか、薬園で自給出来ないものは全国から貢進させていました。集められ



薬猟かぎろひの丘

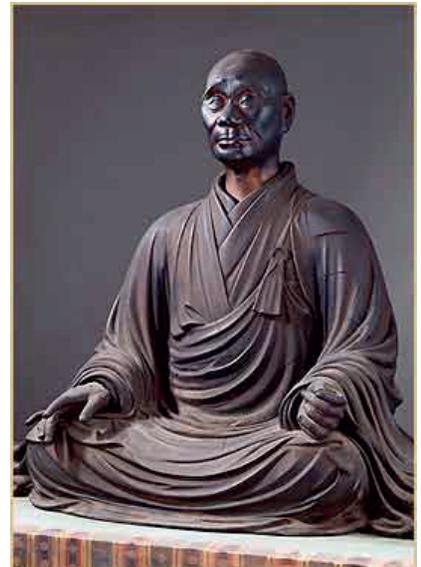
た薬草などは、年末に典薬寮で薬として調剤し、天皇への医療を行う内うちのくすりのつかさ薬司等に配給していました。723年に光明皇后は、民衆のための施薬院と悲田院を興福寺旧境内に設置し、その後施薬院を皇后宮職の管理下に置き、典薬寮の医師に施薬院から入手した薬をもって都中を廻り民衆に薬を与えたとされています。聖武天皇の遺品である正倉院の宝物の中には、60種（現存は39種）の薬物があり、「病に苦しむ民衆に分け与える」旨がほうるしやなぶつしゆじゆやくちよう奉盧舎那仏種々薬帳に記載されています。

同じ頃、<sup>しゆげんどう</sup>修験道の開祖である<sup>えんのぎようじや</sup>役行者は、キハダの内皮を煮てエキスを取り、胃腸など種々の薬効のある薬として施薬を始めました。これが、日本最古の和漢薬として「<sup>だらにすけ</sup>陀羅尼助」や「三光丸」など多くの名称で今も愛用されています。また、行基は、薬草工房で育ったことから、僧になってからも各地で活動する中で病の人たちに薬草を与え、薬師の役割も果たしました。いずれも、民衆救済の思いからの行動によるものです。

また、唐の名僧鑑真是、753年遣唐使とともに来日し、中国の生薬（植物・動物・鉱物性）や薬の製法などを伝えました。「奇効丸」という薬が光明皇后の病気を治したとされ、現在の「六神丸」などにつながった処方といわれています。794年、都が京都に遷るとともに、奈良の町や寺院は衰退していきましたが、全国有数の薬草の産地としての地位は揺るがず、全国第5位にあたる38種の薬草を都に献上し続けました。鎌倉時代には、仏教の興隆とともに一部の寺院では医薬に通じた僧医が医療の一端を担っていました。施薬院が設置されていた興福寺<sup>たもんいん</sup>多間院、53種の薬の処方が残る法隆寺<sup>えい</sup>、<sup>そん</sup>叡尊により再興された西大寺では、所望する民衆たちに薬や養生法を広く普及させ救済に尽力しました。多間院では、<sup>えいしゆん</sup>英俊らが日々のくらし（1478～1618年）を書き綴った多間院日記の中に、また、法隆寺では、「<sup>いやくちようざいこしよう</sup>医薬調剤古抄」と名付けられた書物に、<sup>ほうしんたん</sup>薬の服用や<sup>きんり</sup>施薬が記されています。特に、<sup>そん</sup>叡尊が処方したとされる「<sup>ほうしんたん</sup>豊心丹」は寺中の各子院で製造され、正月明けに製薬呪法を厳修し禁裏と幕府に献上していました。その後、全国を行脚した僧たちによって広がり、この広く民衆に薬を施すという思いや活動が「大和売薬」の始まりにつながっていきます。



役行者坐像



叡尊坐像

### 3. 大和売薬の始まりと発展

当帰、芍薬<sup>じおう</sup>、地黄<sup>やまとも</sup>などの大和物と呼ばれる良質な薬草を産してきた県中南和地域では、薬に関係する業者が各地で誕生します。寺院等で育てられた薬が民間に移行する中で家伝薬として受け継がれていき、家業として売薬業を営む者が、全国津々浦々の人々に薬を届ける「大和売薬」として広まり、江戸時代中期の1783年、薬種屋株や合薬屋株の設立が奈良奉行所で認可され全国的にも名を馳せていきます。地方の村では医師不足に対応する形で置き薬が重用され広まってきました。

宇陀市松山地区には、八代将軍吉宗の全国採薬調査に随行した<sup>もりのとうすけ</sup>森野藤助が、1729年に自ら森野旧薬



森野旧薬園桃岳庵



宇陀市歴史文化館「薬の館」

園を創始し、この地区において薬問屋が軒を並べる礎となりました。今も日本最古の薬草園として姿を残すだけでなく、松山本草など生物多様性の面からも重要な古文書を伝えています。また、明治時代には大手製薬企業の創始者も輩出した地域でもあります。薬問屋を商っていた細川家住宅は、唐破風付きの「天寿丸」の看板が目を引きま

す。現在は、宇陀市歴史文化館薬の館として、当時の木製看板、器具、薬袋などを展示しています。

御所市今住地区は、「三光丸<sup>さんこうがん</sup>」や「蘇命散<sup>そめいさん</sup>」に代表される大和売薬が始まった地域であります。今も、米田家や中嶋家では、創始時代から代表者の襲名を続けています。また、三光丸の処方



三光丸クスリ資料館



高取町くすり資料館

高取町土佐地区は、1640年、高取藩主植村家政が城主となり城下町として栄えた町であります。代々高取藩では、薬草栽培をはじめ医療にも注力したことから、土佐街道沿いには売業者が建ち並びました。眼病に靈験あらたかな壺阪寺が近隣にあったのも一助となっています。「持病丸<sup>じびょうがん</sup>」という薬が製造され、藩主が参勤交代の際に携行させ、他藩の家中にも分与し評判を得ました。現在は、街道沿いにくすり資料館があり当時の売薬業の様子を伝えるとともに、町産の薬草を使った商品を販売する店があります。



橿原市今井地区

橿原市今井地区は、称念寺を中心に発展した寺内町であり、江戸時代以降は自由商業都市として栄えました。そして今井地区でも西大寺の豊心丹に似た「保童圓<sup>ほどうえん</sup>」という薬を製造していた記録があり、各地で売薬行脚を行っていました。そして、今も古い町並みの中に製薬企業の姿をとどめています。

#### 4. 奈良の薬草や薬を未来に

このように薬が誕生し広く民衆へ広まっていった歴史と文化は、古くから良質な薬草を育てたこと、大陸からの医術や文化をいち早く吸収できたことによるものであります。この地域における優良な生薬の価値を未来にもつなげるため、伝統的な薬草の栽培法や生薬の調製法、例えば、大和当帰の場合、優良品種の選抜、栽培方法や収穫後調製法等を軸に地域ブランド化を図ろうとしています。薬草栽培・加工・調製を、奈良ならではの伝統的手法に科学的な検証も加えながら、人々の生活により密着したものとして更に拡大させようとしています。

我が国の薬の発祥の地である奈良には、薬に関して他の地域にはない歴史的・文化的な厚みがあり、今後も、薬草の栽培から薬の製造・販売に至るまで、人々の健康を支える地として、また、それらを実感できる地としてあり続けています。

## ストーリー 2 〈薬草木〉

奈良にある寺社を歩き巡ると、境内などに植えられた美しい花々が出迎えてくれます。参拝客をもてなす想いから植えられたものもありますが、花々の中には薬草木として使われ、人々を助けてきた奈良に都があった時代からの物語があります。

### ◆奈良の寺社と花々



唐招提寺

奈良は、野山が身近にあり、万葉集にも多くの植物が謳われているように、古代より多くの花々を見ることができの地でありました。寺社では蓮、牡丹、桃、梅、桜、百合、蓮翹、菊、椿、橘、厚朴など、ゆかりのある美しい花々で、訪れる参拝客を華やかにもてなし迎えています。それらの花々は歴史や祭事と深い関わりがあるものが多く、鑑真和上もたらした仏の智慧や慈悲の象徴とされる蓮は、唐招提寺で開創以来大切に栽培されています。また、空海が中国から持ち帰った牡丹は県内の多くの寺で大切にされ咲き誇っています。

奈良時代から連綿と続く五穀豊穰を祈る修二会は、東大寺では「お水取り」とも呼ばれ、二月堂の本尊に紅白の椿の造花が供えられます。薬師寺では「花会式」と呼ばれ、桃、梅、桜、百合、菊など十種の植物の造花が供えられます。また、大神神社では春の疫病を鎮めるために律令で定められた「鎮花祭」の神饌として桃の花と忍冬が供えられ、花々は寺社の象徴として大切にされています。



長谷寺

### ◆寺社に咲く花々 ～薬草木～ 奈良の薬の歴史

寺社に咲く花々には美しさを楽しむだけでなく、古代より生薬として薬用に用いられているものがありました。奈良と薬の関わりあいは古く、日本書紀には、611年の推古天皇の薬獵の記録があります。医薬は人々が生きていく上で重要なものであることから、大和朝廷は、大陸から医術や文化をいち早く取り入れました。医療全般を司る機関を設置し、都の周辺に薬園を設けるとともに全国から薬草木を集め薬の製造を行いました。本薬師寺、薬師寺、新薬師寺などでは、薬園としての機能が設けられ



本薬師寺



薬師寺



興福寺



陀羅尼助

ていました。飛鳥時代の遺構である飛鳥京跡苑池から出土した梅、桃、蓮などの植物遺体や木簡から、薬園があり薬を司る機関が活動していたことがうかがえます。蓮、牡丹、桃、桜、橘、厚朴、連翹、忍冬、などは、古代の日本の医方を伝える「大同類聚方」に薬の処方に使う薬草木として、花、葉や根などの部位の使用が記されています。また、奈良時代、興福寺に設置された施薬院では民衆に施しを行い、鎌倉から室町時代にかけて薬の製造や施薬を行っていた様子を多聞院日記は伝えています。西大寺では、鎌倉時代に再興した叡尊上人に由来する「豊心丹」が、多くの寺に伝わる版本にその名を残しており、後に大和売薬につながる代表的な薬として珍重されていました。寺は信仰の対象だけでなく医薬術に関わる場所でもありました。當麻寺中之坊の版本には「陀羅尼助」の名称が記されています。これは、興福寺の施薬院と同じ頃、修験道の開祖である役行者がキハダの内皮を煮てエキスを取り、種々の効能をもつ役行者秘伝の薬とした陀羅尼助を指すもので、主な活動の場であった吉野山や洞川地方には、今もその製法を受け継ぐ製薬企業があります。

江戸時代に入ると薬の需要が高まり、幕府は国内での自給率を高めるために各地へ採薬使を派遣して薬草木の調査・採集・栽培を行いました。森野旧薬園は、徳川吉宗の生薬国産化政策に沿うかたちで初代森野藤助が開いた日本最古の私設薬草園で、約 250 種類の薬草木を今に伝えています。

寺社での施薬は次第に民間へ移行していき、江戸時代以降は、県内各地に売薬業を営む地域が形成され、「大和売薬」として地域の主力産業へと発展していきました。高取町の土佐街道や宇陀市松山地区の「薬のまち」として昔からの薬の看板が残るまちなみや、三光丸クスリ資料館などに収蔵されている薬造りや配置販売の道具が当時の歴史を物語っています。



森野旧薬園



三光丸クスリ資料館

◆薬草木からの贈り物

奈良では、薬草木が、薬以外にも薬湯、薬酒、薬膳など、姿かたちを変えて古くから民衆の生活に寄り添い続けてきました。

薬湯は、古代、平城京で悪疫が流行した時に、都の南にあった薬園の薬草を薬湯として病人に施したのがはじまりで、その後、都の東方にも薬園を新たに設け、今の薬師湯殿につながっています。光明皇后ゆかりの法華寺には、蒸気に石菖など薬草木をかざし浴室に送る「からふろ」が残ります。また、



霊山寺薬師湯殿



法華寺浴室

奈良時代に記された正倉院の古文書には、「薬の酒」が記され、古来より生薬を使ったお酒があったことを伝えています。大神神社では、「鎮花祭」の時に三輪山に自生する忍冬の花と蕾をつけ込んだ忍冬酒のほか、一年間の邪気を払い長寿を願って正月に呑む縁起物の酒である屠蘇の文化を大切にしている。寺の精進料理から、美味しく健康にも良い薬草料理として、本葛の刺身など多くのレシピが研究され、寺の付近で採れる薬草を使った薬膳が食養生の1つとして人々に提供されてきました。薬草木にかかる祭事として西大寺の大茶盛、神農薬祖神祭、奥田の蓮取り行事、蔵王堂の蛙飛び行事などがあり薬草を体験し大切に作る心が、次世代に受け継がれています。



忍冬酒



大願寺の薬草料理

◆「薬草木の花咲く都、奈良」

薬草木の歴史と文化があふれる奈良では、寺社や薬園などで薬草木の花を愛でるだけでなく、まちなかを散策すると薬、薬膳、薬湯、薬酒など、姿かたちを変えた薬草木からの贈り物たちとともに時を過ごすことができます。古代より人々の健やかな暮らしを支え続けてきた奈良は、これからも薬草木文化「薬草木の花咲く都、奈良」としてあり続けます。